

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02733

研究課題名（和文）芸予諸島方言におけるアクセントの研究

研究課題名（英文）A Study of Accents in Geyo Islands Dialect

研究代表者

秋山 英治（Akiyama, Eiji）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：40636148

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：瀬戸内しまなみ海道域の方言アクセントに関して調査を行ったところ、名詞・動詞・形容詞すべてにおいて、アクセントタイプの分布域が同じであることが明らかになった。これらの結果をもとに、歴史的変遷について考察したところ、かつて芸予諸島には、広い地域に、「京阪式アクセント」が分布しており、自律的な変化によって「東京式アクセント」へ変化した可能性が高いことが明らかになった。さらに、瀬戸内しまなみ海道の架橋による影響を分析したところ、架橋が各地の方言アクセントに影響を与えていないことも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

芸予諸島は、いわゆる京阪式アクセントと東京式アクセントが隣接する地域として、アクセント研究の初期の段階から注目されてきた。しかし、未調査の地点も多く、その実態については、明らかにされていなかった。本研究によって、芸予諸島のアクセントの実態を解明した点に意義がある。

また、瀬戸内しまなみ海道の架橋が、当該地域の方言アクセントに影響を与えたのかについて明らかにした点についても意義がある。

研究成果の概要（英文）： In the areas connected by the Setouchi Shimanami Kaido highway bridge, multiple investigations were carried out on the accents of the Geiyo Islands dialect. The results revealed that all nouns, verbs, and adjectives share the same areas of accent-type distribution. Based on these results, the historical development of Geiyo Islands dialect accents was then analyzed. This raised the hypothesis that Keihan-type accents originally became widespread throughout the Geiyo Islands and later evolved autonomously to Tokyo-style accents.

The effect of the Setouchi Shimanami Kaido highway bridge, which connects the Geiyo Islands, on the regional accents of each island was also examined, although no discernible impact was found.

研究分野：日本語学

キーワード：アクセント 芸予諸島 瀬戸内しまなみ海道 京阪式アクセント（中央式） 東京式アクセント 芸予諸島方言アクセントデータベース

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 愛媛・広島県境の芸予諸島のアクセントは、「京阪式アクセント」「四国系アクセント」か、それとも「東京式アクセント」「中国系アクセント」か、盛んに議論されてきた。愛宕八郎康隆ほか(1970)、町博光(1979)などの研究により、愛媛県伯方島と広島県生口島との間に、境界線が引けることが明らかになった。

(2) 愛媛県魚島など特定の島については調査が行われるものの、芸予諸島全域をカバーする調査研究は行われてこなかった。西瀬戸自動車道(「瀬戸内しまなみ海道」)が開通したことを契機に、2002年から2004年にかけて、「瀬戸内しまなみ海道」地域の方言調査研究が行われた(科学研究費補助金・基盤研究(C):「しまなみ」架橋による地域方言の変化、研究代表者・高橋顕志)が、文法・音声・語彙・言語行動など幅広い分野を扱っていたため、アクセントについては簡易調査しか行われず、高起・低起の式の有無や音調型など詳細についてはよくわかっていない。また、この調査では10地点程度となっており(佐藤栄作(2005))、芸予諸島の全容を知ることはできない。

(3) 愛媛県東部から香川県にかけて、「下降式音調」が聞かれることが報告されている(中井幸比古(1984)、上野善道(1995)、秋山英治(2017)など)。上野善道(2006)をはじめ、日本語諸方言アクセントの祖体系を考察する上で、「下降式音調」は重要な特徴と考えられているが、芸予諸島については、詳細な調査が行われていないために、分布しているのかどうか、その存在自体が不明である。

以上のようにアクセント研究の初期段階から注目されつつも、芸予諸島には、未調査の島、また調査が不十分な島が多く残されており、その実態がよくわかっていない。「瀬戸内しまなみ」が全線開通した際に調査が行われているが、その後、架橋による影響についての調査は行われておらず、架橋が芸予諸島においてどのような影響を与えたかについて、よくわかっていない。

2. 研究の目的

(1) 芸予諸島のアクセントについて、世代別の調査を行い、未調査の島が多く残る芸予諸島のアクセントの実態を解明する。

(2) 上記(1)の成果をもとに、「京阪式アクセント」から「東京式アクセント」が誕生したという日本語諸方言アクセントの成立過程の仮説を検証する。

(3) 「瀬戸内しまなみ海道」の開通によって、芸予諸島にどのような変化が起きたのか、架橋による影響を解明する。

3. 研究の方法

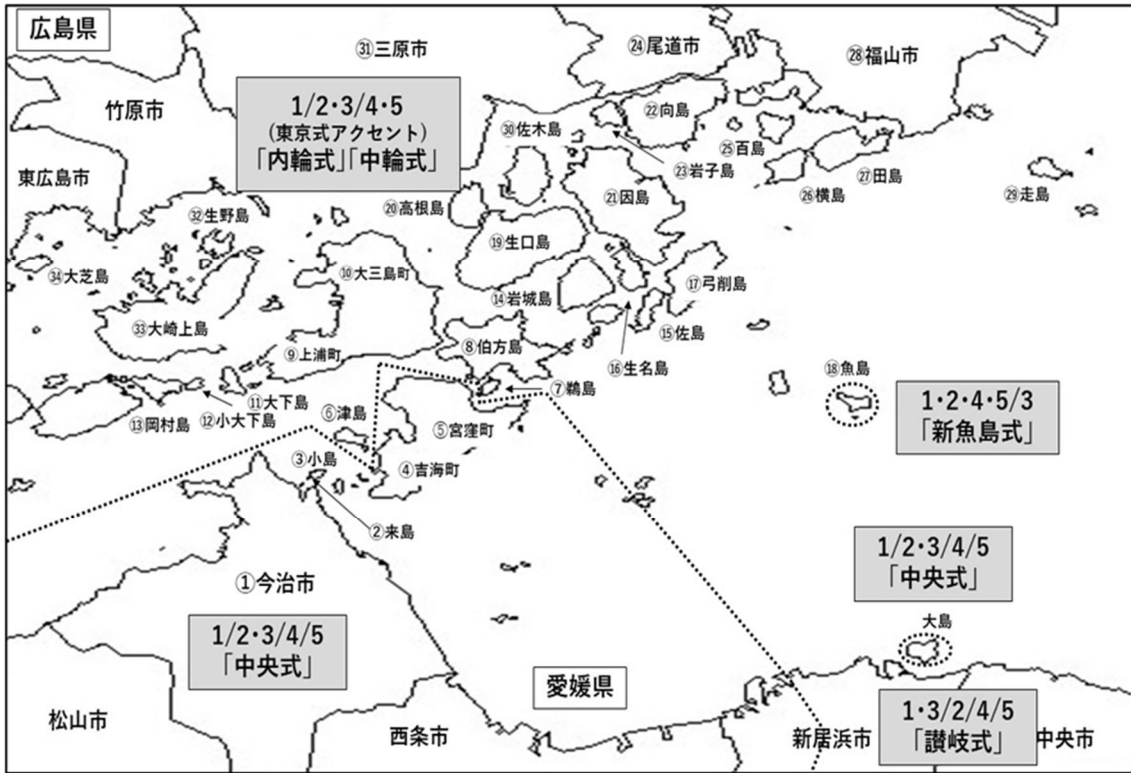
(1) コロナ禍の影響により、当初予定していた調査地点すべてを調査することができなかったが、「瀬戸内しまなみ海道」の愛媛県側の起点となる今治市から終点の尾道市、さらに尾道市の周辺域として、東は福山市、西は東広島市まで、愛媛県側18地点、広島県側16地点、計34地点で、アクセント調査(「読ませる調査」)を行った。調査を行ったのは、第1世代(1959年以前生まれ)、第2世代(1960年~1989年生まれ)、第3世代(1990年以降生まれ)の3世代である(人口等の関係から、調査地点すべてで3世代すべてに調査が行えているわけではない)。

調査語彙は、和語・名詞(1拍語~4拍語:計676語 一部、漢語・外来語も含む)、和語・動詞(2拍語~4拍語:計176語)、和語・形容詞(2拍語~4拍語:計95語)、漢語・名詞(1拍語~3拍語:計700語)、外来語・名詞(2拍語~5拍語:計1145語)、複合語・名詞(3拍語~10拍語:計1532語)である。ただし、コロナ禍の影響により、調査地点すべてで ~ を調査できているわけではない。本研究では、調査地点すべてで調査ができている ~ を中心に分析を行った。

(2) 「瀬戸内しまなみ街道」架橋による影響について、上記(1)の調査対象者に対して、「架橋の影響」(瀬戸内しまなみ海道の架橋によって何か影響があったか。影響があった場合、どのような影響があったか。とくにことば(方言)に影響があったか)、「生活圏」(普段の買物では、どこによく行くか)などについて、半構造化インタビューにて調査した。諸事情により調査を行うことができなかった調査対象者もいるが、(1)の調査地点(34地点)すべての地点で調査を行った(愛媛県35人、広島県35人。計70人)。

4. 研究成果

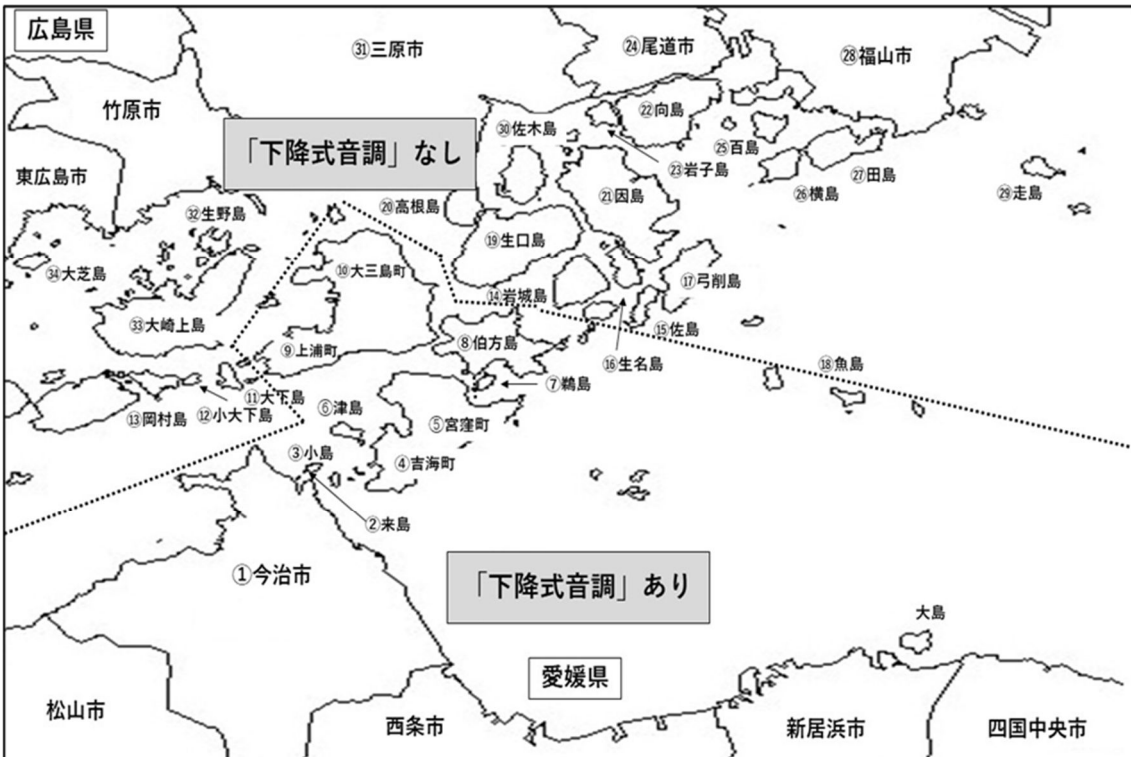
(1) 芸予諸島のアクセントについて、2拍名詞及び1拍名詞の類別体系(「式」)をもとに、最も年齢の高い第1世代の名詞のアクセントタイプを示すと、【図1】のようになる(境界を点線で示す)。



【図1】 名詞のアクセントからみた芸予諸島方言

アクセント研究の初期段階より注目を集めてきた「京阪式アクセント」(「中央式」)と「東京式アクセント」(「内輪式」「中輪式」)の境界が、佐藤栄作(2005)や吉田健二・清水誠治(2015)が報告している今治市大島と鷗島・伯方島の間にあることが再確認された。また新たに、今治市大島に隣接する津島に「東京式アクセント」(「内輪式」「中輪式」)が分布していること、魚島の2拍名詞の類別体系が、秋永一枝(1986a・1986b)・上野善道(1989・1990)など先行研究が報告する体系(1・2/3/4・5)と異なる体系(1・2・4・5/3)であることなどが明らかになった。

名詞の類別体系による「京阪式アクセント」(「中央式」)と「東京式アクセント」(「内輪式」「中輪式」)の分布域については、動詞・形容詞においても同じであること、式 の対立の有無においても同じ分布域であることも明らかになった。下降の度合いや出現頻度による地点差はあるものの、式 の対立のある地点すべてにおいて、「下降式音調」が聴かれるが、その他にも、津島・鷗島・伯方島・大三島・魚島など、式 の対立のない島々においても、「下降式音調」



【図2】 「下降式音調」の有無からみた芸予諸島方言

が聴かれること(式 の対立の有無と分布域が異なる)ことが明らかになった(【図2】)。式 の対立のある地域だけでなく、津島・鵜島・伯方島・大三島・魚島など、現在、式 の対立のない島々においても、かつて 下降式 が存在しており、式 の対立があった可能性が考えられる。

世代差についてみると、名詞・動詞・形容詞すべてにおいて、第2世代以降、共通語化による変化が起きていることが明らかになった。共通語化は、第2世代よりも第3世代に起きており、若い世代により顕著に起きている。共通語化は、アクセントタイプによって異なりがあり、「京阪式アクセント」(「中央式」)が分布する地点により顕著に起きる傾向があることが明らかになった。

(2) 日本語諸方言のアクセントの成立過程について、金田一春彦(1954)は、「京阪式アクセント」から「東京式アクセント」が成立したと述べている。山口幸洋(1998)のように、一型アクセントが「原始日本語アクセント」とする考えもあるが、金田一春彦(1954)のこの考えが、日本語アクセントの史的・研究において広く認められ、“定説”のようになっている。「京阪式アクセント」と「東京式アクセント」が隣接する芸予諸島においても、この「定説」があてはまるか、(1)の調査結果をもとに検証した。

「下降式音調」が式 の対立のない地域においても聴かれること、「東京式アクセント」(「内輪式」「中輪式」)の津島や、独自の類別体系を示す魚島において、「京阪式アクセント」(「中央式」)の特徴がみられることなどから、“定説”と同じく、「京阪式アクセント」(「中央式」)から「東京式アクセント」(「内輪式」「中輪式」)が誕生した可能性が高いことが明らかになった。芸予諸島には、かつて広い地域に「京阪式アクセント」(「中央式」)が分布しており、時に周囲との接触の影響を受けながらも、自律的な変化によって「東京式アクセント」(「内輪式」「中輪式」)へ変化したと考えられる。

(3) 1999年5月1日に全線開通し、すでに20年ほど経過している「瀬戸内しまなみ海道」の架橋が、芸予諸島のアクセント(方言)にどのような影響を与えたか(あるいは影響を与えなかったか)について、半構造化インタビューの結果を分析・考察した。愛媛県の回答者、広島県の回答者ともに多くの回答者が、架橋により「観光客が増えた」「便利になった」「生活圏が変わった」「移住者が増えた」などとコメントしており、架橋により生活環境に変化が起きたことを実感している。ただし、架橋によることば(方言)への影響については、1人を除いて全員が、「架橋による影響はなかった」と回答しており、架橋による影響はなかったと結論づけられる。アクセントタイプにより変化の異なりがあるが、名詞・動詞・形容詞すべてにおいて第2世代以降に起きている共通語化について、若い世代においてメディアによる影響が及んでいることを述べたコメントが複数みられることから、架橋の影響ではなく、テレビなどメディアの影響によるものであることが明らかになった。

(4) 特定の地域のみでの調査となるが、漢語・外来語アクセントについて行った調査の結果を分析・考察したところ、芸予諸島の漢語・外来語のアクセントは、松森晶子(2002)のいうように、「方言差が激しい和語と異なり、全国的に同じような規則に従う」ことが明らかになった。和語のシステムと漢語・外来語のシステムに違いがあることが示唆される結果となった。漢語・外来語のアクセントについては、とくに促音の振る舞いが、長音や撥音など他の特殊拍と違うことなども明らかになった。

漢語アクセントの調査を行うにあたり、金田一春彦(1980)や奥村三雄(1955・1961・1963・1964・1974・1981・1990)などによって提唱されている漢語の類別語彙を再検討したところ、漢語の類別語彙には1~3拍のすべての拍で欠けてしまう類があること、2拍第2類・3拍第5類のように1つの類として立てるのが難しい類があることなど、和語と同じような類別語彙として認定することに種々の問題があることが明らかになった。

さらに、複合名詞アクセントについて行った調査の結果を分析・考察したところ、和田実(1942・1943)や前田勇(1953)ら多くの先行研究が述べる「式保存規則」について、<式>を有する愛媛県東中予方言(松山市方言・今治市方言)においても、高い比率で守っていることが明らかになった。とくに後部要素に着目して分析したところ、4拍の複合名詞において、特定の後部要素に地域差がみられること、和田実(1942・1943)がいう後部要素における類別語彙としての第2類と第3類の区別が、京都方言の特徴を述べた中井幸比古(2012)とやや異なり、愛媛県東中予方言(松山市方言・今治市方言)では、4拍及び5拍の複合名詞ともに認められることなどが明らかになった。

(5) 今後の課題としては、コロナ禍の影響により、当初予定していた調査ができなかった地点についての調査を行うとともに、調査した地点についても、漢語・外来語・複合語などの調査が行えていない地点が残っていることから、これらの地点について追加調査を行い、芸予諸島のアクセントの実態をさらに詳細に分析・考察し、解明していく必要がある。

また、十分な考察ができていない日本語諸方言アクセントの成立過程について、これまで行ってきた調査結果と今後行う調査結果を併せて、分析・考察を深めていく必要がある。

< 引用文献 >

- 秋永一枝 (1986a) 「愛媛県魚島における老年層のアクセント 服部・金田一両博士に伺う」『月刊言語』15-10、84-87.
- 秋永一枝 (1986b) 「魚島アクセントの変遷」『国文学研究』90、46-60.
- 秋山英治 (2017) 『愛媛県東中予方言のアクセントと共通語のアクセント 日本語史再建のために』おうふう
- 愛宕八郎康隆・神部宏泰・服部敬之・室山敏昭・佐藤虎男・岡野信子・白石寿文 (1970) 「伯方島アクセントは結局中国系か四国系か」『方言研究年報』11・12、159-188.
- 上野善道 (1995) 「松山市方言アクセントの調査報告」『愛文』30、1-30.
- 上野善道 (1989) 「愛媛県魚島方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』17、59-80.
- 上野善道 (1990) 「魚島方言の用言のアクセント」『東京大学言語学論集 '89』、53-117.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130、1-42.
- 奥村三雄 (1955) 「東西アクセント分離の時期-外来語のアクセント-」『国語国文』24-12、34-44.
- 奥村三雄 (1961) 「漢語のアクセント」『国語国文』30-1、1-16.
- 奥村三雄 (1963) 「漢語のアクセント アクセントから語彙論へ」『国語学』55、36-53.
- 奥村三雄 (1964) 「漢語アクセントの一性格」『国語国文』33-2、48-68.
- 奥村三雄 (1974) 「諸方言アクセント分派の時期 漢語アクセントの研究」『方言学研究叢書』3、1-38.
- 奥村三雄 (1981) 『平曲譜本の研究』桜楓社
- 奥村三雄 (1990) 『方言国語史研究』東京堂出版
- 金田一春彦 (1954) 「東西両アクセントのちがいが出来るまで」『文学』22-8、63-84. (金田一春彦 (1975) 『日本語の方言 アクセントの変遷とその実相』教育出版に再録)
- 金田一春彦 (1980) 「味噌よりは新しく茶よりは古い アクセントから見た日本祖語と字音語」『言語』9-4、88-98.
- 佐藤栄作 (2005b) 「しまなみ架橋時代のアクセント 伯方島のアクセントを中心に」『「しまなみ」架橋による地域方言の変化』(平成14年度～16年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(1))研究成果報告書) 11-28.
- 高橋顕志 (2005) 『「しまなみ」架橋による地域方言の変化』平成14年度～16年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(1))研究成果報告書
- 中井幸比古 (1984) 「愛媛県新居浜市におけるアクセントの境界について」『言語学研究』5、121-139.
- 中井幸比古 (2012) 「京都方言における2拍+2拍和語複合名詞のアクセントについて」『音声研究』16-3、47-58.
- 町博光 (1979) 「生口島御寺方言の語アクセント」『内海文化研究紀要』7、47-71.
- 松森晶子 (2002) 「音韻(理論・現代)」『国語学』211、61-72.
- 山口幸洋 (1998) 『日本語方言一型アクセントの研究』ひつじ書房
- 吉田健二・清水誠治 (2015) 「四国北部および島嶼地域の方言アクセントの生態 その統計的特徴と歴史の変遷の推定」『公益財団法人福武財団 アミューラルレポート2015』
- 前田勇 (1953) 「大阪アクセントの複合法則 四音節無活用語の場合」『近畿方言』19、9-17.
- 和田実 (1942) 「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』71、10-13.
- 和田実 (1943) 「複合語アクセントの後部成素として見た二音節名詞」『方言研究』7、1-26.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 秋山英治	4. 巻 51
2. 論文標題 愛媛県島嶼部方言における動詞アクセント資料	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 人文学編	6. 最初と最後の頁 109-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 秋山英治	4. 巻 23
2. 論文標題 愛媛県魚島方言における動詞のアクセント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学論叢	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 秋山英治	4. 巻 52
2. 論文標題 愛媛県島嶼部における動詞のアクセント	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 人文学編	6. 最初と最後の頁 67-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 秋山英治	4. 巻 49
2. 論文標題 愛媛県魚島方言における外来語のアクセント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 人文学編	6. 最初と最後の頁 17-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 秋山英治	4. 巻 22
2. 論文標題 愛媛県魚島方言における2字漢語のアクセント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学論叢（愛媛大学人文学会）	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋山英治	4. 巻 48
2. 論文標題 愛媛県島嶼部方言のアクセント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 人文学編	6. 最初と最後の頁 79-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 秋山英治	4. 巻 45
2. 論文標題 愛媛県東中予方言における2字漢語アクセントの世代差	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 人文学編	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 秋山英治	4. 巻 44
2. 論文標題 愛媛県東中予方言における2字漢語のアクセント	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集人文学編	6. 最初と最後の頁 105-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 秋山英治
2. 発表標題 漢語類別語彙の検討
3. 学会等名 日本音声学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------